

『美那登能波奈横濱奇談』

文化女子大学教授(文学・日本文化論担当) 近藤 尚子

横浜は2009年、開港150周年に沸いた。ペリーが軍艦4隻を率いて浦賀沖に来航してから5年後の安政5(1858)年に日米修好通商条約が結ばれ、翌安政6(1859)年に開港したのである。寒村であった横浜は一躍時代の注目を集め、横浜には多くのジャーナリストや絵師が集まり、たくさんの情報が発信された。『美那登能波奈横濱奇談』はそのような開国直後の横浜を伝える1冊である。作者「菊苑老人」はおそらくペンネームであろう。この筆名では本書1冊しか出版されておらず、なお探索の余地がある。また刊記はなく、いくつかの資料に文久2(1862)年あるいは文久3(1863)年刊行とある。18.5×12cm、本文は墨付29丁で、内訳は8カ国の国旗(カラー1丁)・洋銀直段荒増(2丁)・本文と外国人商館番附并人名(26丁)である。このうち洋銀直段荒増は、アメリカ、フランス、イギリス、ロシア(ロシア)のコインそれぞれ3種類ずつを掲げ、「直段」すなわち相場を示したものだが、今回調査した早稲田大学図書館所蔵の本2種には共がない。この2種も無刊記である。作者も刊年もよくわからないこの小冊は、しかし後に述べるような理由で注目すべき本である。

まず刊行の目的は序文に記されている(引用に際し漢字は新字体に改め、本文は総ルビに近いが適宜省略する。また、句点を付した)。横浜は開港以来「忽繁栄の地となり外異の国々万里の波濤を犯して渡来せしより我国になき異品奇談も多きを遠程の老幼は力及ばで終に見聞せざらんは遺憾なるべければ此に小冊をあらはして其形容をらしめば長夜の話種ともならんか」という。開港から1年ほどでめざましい発展を遂げた横浜のようすは、本書の「横濱港繁栄之図」にうかがえる。そこには運上所と東西の波止場を中心に異人屋敷や

異人墓所をも擁する横浜の姿が描かれている。本文の最後には「外国人商館番附并人名」があり、一番から百十番までの外国人商館と居住者の国籍・名前が掲げられている。このうち三十九番「亜ヘツポロン」とあるのは、医師であり『和英語林集成』とそのヘボン式ローマ字でも知られるJ・C・ヘボンである。文久2年に転居してきた。当時の横浜には国内外から人々が集まり、「我国になき異品奇談」も多くあった。それを実際に見聞きすることのできない「遠程の老幼」のためにこの小冊を著した、というのである。巻末にも「元来童蒙のために著す書なるをもて」とあり、これらの記述による限り老幼や童蒙のために概略を記した、ということである。本文は通商のようす(4丁裏)・開港の経緯(5丁表)・町の地理(5丁裏)・帯刀無提灯の禁止(8丁裏)・港崎遊女町(9丁表)・岩亀楼(10丁裏)・異人屋敷(11丁表)・異人の生活(11丁裏)・異人の旅籠屋(14丁表)・ソンドフ(14丁裏)・異国船(15丁表)・異人の調練(17丁表)・競馬(17丁裏)・根付時計(18丁表)・写真鏡(18丁裏)・異人女性(19丁表)・異人小児(20丁裏)・ロシアメン(21丁裏)・洋犬(21丁裏)・黒人(22丁裏)・天主堂(23丁表)・横文字のここと(24丁表)・アルファベットと数字(24丁裏)が図を挿入しながら述べられている。挿図は9図で、仮称するならば・横濱港繁栄之図(1丁裏～2丁表)・ブンダフの行進(2丁裏～3丁表)・港崎町遊女屋(3丁裏～4丁表)・異国船(6丁裏～7丁表)・写真鏡(9丁裏～10丁表)・小児遊戯(12丁裏～13丁表)・崑崙層刺遠眼鏡(15丁裏～16丁表)・本町北横丁よりの真景(19丁裏～20丁表)・天主堂(23丁裏)である。開港の経緯と町の地理を記した本文の中に、「僅五ヶ年にも満たざるにかく繁花の勝地となりし事」

(7丁裏)とあり、1859年の開港から5年以内の刊行であることが知られる。また、写真鏡についての記事に「弁天通り五丁目に居住する桜田蓮杖といふもの」(19丁表)とあるのは日本写真師の祖とされる下岡蓮杖のことである。蓮杖が弁天町に写真館を開業したのは文久2年の終わりごろとされており、これも本書刊行の時期を知る手がかりとなる。

鳥瞰図である「横濱港繁栄之図」(下左)と共に読むとき、本書の地理の説明は具体的であり、格好のガイドとなっている。たとえば「俵入船町は吉田ばしの手まへなり。駒形町は御運上所の東也。芝居は北仲通り二丁目にあり。役者は江戸表より立者入かはり立かはり来りて定芝居たゆる間なし。相撲は太田町六丁目金毘羅境内にあり。これも四季の興行休むことなし。波止場は御運上所の前なり。異人の波止場は谷戸ばしの手まへ也。元町はほり割の向ふ増徳院の右手なり」(6丁表)とある。運上所を中心とした町の様子が調子のよい文体で描かれ、芝居や相撲などの賑わいも想像できる。このような横浜の繁栄と、「異人のようす」を伝えることが本書の眼目であろうと思われ、異人の生活についても詳細に描かれる。「異人朝暮の行状」は次のようである。「朝五ツ半時頃四ツ時頃に目を覚しすくに入湯するなり。その湯のぬるき事ひなた水

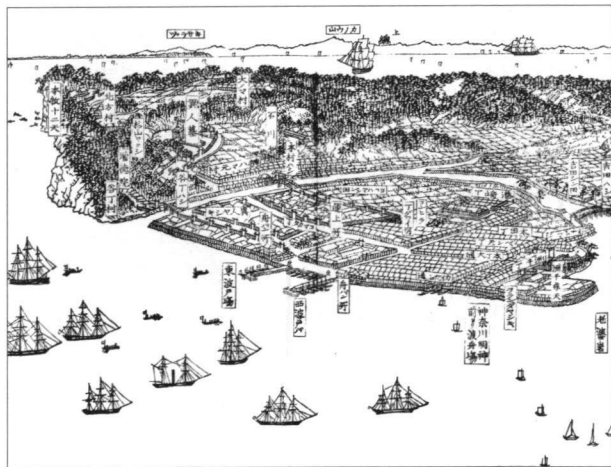
のごとし。中には暑寒ともに水ばかり遣ふものもあり。夫より常に懸置ところの姿見鏡それく丈四尺ほどなり>にむかひうがい手水をつかひ髪を直しシャボン<あかをとるもの>または匂ひの水もつて薄化粧などいたし夫より服を着替る也」(11丁裏)。

また、異人の旅籠屋についての記述の中にはピリヤードの紹介がある。「其うちに五十畳敷ぐらいとも見ゆる大座敷ありて真中に長サ三間ばかり巾式間ほどの机のやうなるものあり。回りのふち高さ式寸ほどにて其すみずみに穴あり。其盤面に式寸五分ぐらいの玉をおきその玉を相手と替り替り棒を以て突ば我玉と相手の玉とあたり合あたり合その玉穴に入るの次第にて勝と見へたり入らざるは負なるべし」。このほか根付時計(懐中時計)や写真鏡などの新奇な事物について紹介している。本書のタイトルに「奇談」とある通り、中には本当の「奇談」もあって、そのいくつかは後の俗説の震源となっているのである。

最後に図に関して述べておく。本書の図は、先行する類書や「横浜絵」とりわけその第一人者であった五雲亭貞秀の『横濱開港見聞誌』(文久2年刊)(下右)の影響を受けている。貞秀自身が横浜絵を描くに当たっては長崎絵を利用した、と述べており、当時は剽窃ひょうせつというような感覚はない。例を挙げておくので、両者を比較してほしい。



「横濱港繁栄之図」『美那登能波奈横濱奇談』より



『横濱開港見聞誌』に収められた鳥瞰図